

冷害年(平成15年)における、いもち病軽減事例(宮城県)

農水省が10月15日現在で発表した平成15年産水稻の作柄は、全国平均90と平成5年以来の「不良」となりました。

しかし、そんな中でも冷害に負けないイネもあった… と「現代農業」誌11月号が伝えています。

今年のイネは岩手県南部や宮城県北部では、不稔、白ふに加えていもち病が大発生しました。特に宮城県の作況指数は69で、古川市ではほとんどの田んぼで被害がみられました。



今年は

- ① 雨でぬれている時期が長かった。
- ② 生育が遅れて出穂がバラつき、イネの抵抗性が一番弱い開花時期が長かった。

など、いもち病の発生しやすい条件が多く、菌密度が上がったのが原因とされます。

しかし、古川市の農家さんが、追肥として7月15日に30kg/10aを散布したところ、ひとめぼれにいもち病はほとんど発生しませんでした。

これはケイ酸が、軟弱になっているイネの細胞を硬くしていもち病菌が進入しにくくなったことによる効果と考えられます。

また、出穂前40日に追肥するのは、それによって穂揃いが良くなり、刈り取り適期がバラつかなる分、屑米が減るからです。近所の田んぼでは、いもち病の被害を受けたというのが3割近くに及んだのに対し、古川市の農家さんのところでは、いもち病の被害は殆どありませんでした。

しかも低温に弱いササニシキも順調に太り始めているのです。



その後、古川市の農家さんを訪ねたところ、「収量ではよその農家より多かった」「これはケイ酸と加里の相乗効果だと思う」と言われていました。

また、「転作で3年に1回、大豆をつくっているが、けい酸加里肥料を施用しておく次の年にも差が出る」とのことでした。

古川市の農家さんは、「努力したかいのあった年」と話されています。